

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<書評と紹介>石田雅彦著『「茶の湯」前史の研究 : 宋代片茶文化完成から日本の茶の湯へ, <書評と紹介>富坂キリスト教センター編『女性キリスト者と戦争』

著者	遠山 久也, 横山 恵美
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	60
ページ	103-110
発行年	2003-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/10780

〈書評と紹介〉

石田雅彦著

『茶の湯』 前史の研究

—宋代片茶文化完成から日本の茶の湯へ—

遠山 久也

本書は法政大学大学院を修了し、現在まで四十年近く裏千家今日庵東京出張所に勤務してきた著者が、「文化としての茶の研究」に携わり、今日の長きに渡り積み重ねてきた研究成果が、学位を授与されるに至った労作である。

茶の湯に造詣が深い著者が、日本文化の一つとして茶の湯（茶道）を取り上げ、その発生を中国にまで遡り、それが日本へ大きな影響を与えた経緯を探索。「はじめに」に見られるように著者は「鎌倉時代の茶の普及の考察」から手を染め、その発展の過程の中で、特に宋の国における茶の重要性をうかがい知り、それを調べることににより、入宋僧侶が持ち帰った茶の意味も解明できるといふ。そして、「中国にとって茶とは何であったか」を考察し、「茶の湯という日本の重要な伝統文化」の出発点の位置づけとその姿を浮き彫りにすることを本書の目的としている。構成は、次の通りである。

第一章 中国「茶」史―その萌芽より唐代まで―

書評と紹介

第二章 宋代茶の産地とその種類

第三章 宋代茶の流通

第四章 北苑茶焙

第五章 入宋僧侶と茶の係わり

第六章 日本における喫茶の萌芽とその普及―茶の湯への序章―

付『宋代茶法研究資料（一―八）』註解 佐伯富編

第一章「中国「茶」史―その萌芽より唐代まで―」は、本書の「序編」ともいえる部分である。茶の発生から文化に発展するまでの過程を中国における最も古典的な茶の文献である唐代の陸羽によつて著された『茶経』を分析することによつて述べる。茶は「茶」といわれる羹に入れる野菜の一種として現れたが、三国時代になると「茶筴」などといわれるように、羹に入れる野菜的な扱いとは別に、独立した飲料として認められるようになり、唐代に入り飲茶風習の定着や茶に税が課され始めた頃より「茶」の字が「茶」字から分立し独立していったと述べる。次にこれまであまり注目されなかつた晋代に焦点をあて、茶園の発生・安定、茶種の多様化と質的向上、末茶の発生、道具趣味の発生、茶果による接待方法の発生などが晋代にみられることから、飲茶法や茶の製造法の基礎的成立は、唐代ではなく晋代であると位置づけた。また、茶はあくまで一つの飲料の材料でしかないが、茶が何かと組むことによつて「人を接待する主役になりうる」とし、それが見られる晋代にすでに茶が「文化」の要素を持ち始め、飲料から文化への脱皮を始めていたとする。そして、「茶菓」のみによる接

客法を「現在我々の住む世紀」にまで通ずる接客法として位置づけている。さらに、唐代になり、高級茶である團茶と庶民が日常的に飲む散茶とに分かれたことを指摘している。このように茶が日常必需品でありながら形を変えることによって「高度な茶の文化」へと成長する分かれ道となったと指摘し、これを著者は、現在の日本にも見られるように、日常には飲茶がなされながらも抹茶を媒介とする「茶道」という伝統文化が存在する状態に酷似すると見る。

第二章「宋代茶の産地とその種類」は、これまではまったくいつてよいほど取り上げられなかった分野の研究である。ここからが本書の「本編」といえる。本章では、宋代における茶の生産地、茶の種類、茶の生産量、などを考察する。膨大な宋代の根本史料を使って、茶の生産地とそこから生産される茶の種類・名を検索した限りをすべて表に示しつつ、論述している。まず、宋代における片茶と散茶の生産地と茶の種類・茶名について、続いて、当時各地における茶の生産額がどれくらいあったのかを、北宋期と南宋期それぞれについて表に示している。また宋全域の「茶の生産地」（散茶に関連している地名）を表に示すに際しては、四川地方の茶は専売外で宋代史料には扱われていないため、当時の文献に散見されるもののなかから探し出し、四川地方の茶の種類・名、産地等を抽出している。さらにそれらをもとに「茶の生産地」地図を作成し掲載している。これまでのことから末茶について、粉末の茶であるから、固形の茶（片茶）でない茶（散茶）に分類されるのに、独立して末茶として扱われていることに着目し、末

茶を「片茶から造られる茶」ではなく「散茶から直接造られる茶」であると位置づける。そして研究史上取り扱われなかった水磨茶について述べ、宋代に水力利用による「茶水磨」が存在したことを証明する。ここでは葉茶を直接「末茶」にする用法が始められていることを示し、『農書』より「水磨図」を引用している。ここで、宋代では日常の飲用方もほとんどが末茶飲であり葉茶飲ではないことを明示している。

第三章「宋代茶の流通」では、前章を受けて、生産された膨大な量の茶が、どのようなルートをたどって生産地から消費地に流れていったかを考察している。まず、宋代の「茶法制度及び沿革」をたどり、「茶の専売」について概観する。そして茶の売買価格を見る。これは、「当該時期の中国にとって茶とは何か・中国の人々にとって茶とは何なる物であったか」ということを具体的に示唆できるものは「茶の値段」であるとすると著者の理解に基づく。ここで、散茶は生産された地域で基本的に消費されること、片茶が非常に高価であることなどを解明している。本章「結論」で、多くの片茶には日常の飲み物とは違う特別な飲み物としての要求があったことについて、これは、宋代の経済の発展による消費者の増大によるものであるが、その中心となったのは宋代の政治文化を支えた士大夫読書人階級の人々であり豪商であり、彼らは片茶とその文化に対して非常な熱心さをもって臨んだのであると述べている。

第四章「北苑茶焙」では、歳貢茶を生産していた北苑茶焙（福建建州＝現福建省建甌市）について述べる。日本で北苑茶焙に

ついで触れる最初の論考といえる。龍・鳳という歳貢茶こそが、強大な中央集権によって生まれた「宋代を特徴づける茶の文化」であったが、「強い特徴」であったがため、宋朝が減じるとともに片茶文化が減び、一方で「日本へ末茶文化を押し出した」力になったのではないかと主張する。そして、鳳凰山の麓に「北苑」と呼ばれる茶園があったことを記す「北苑石刻碑」を残した柯適が、当時の監察御史であった邱荷であることを論証する。建安(建州)での茶の生産の始まり、北苑の名の始まり、そこで生産される龍鳳茶などについて述べ、北苑茶焙は片茶の究極化を目指すことになる」と指摘する。次に、北苑茶焙の大凡の構成を述べ、国家直轄の内焙、民間経営の外焙、各茶園の現地比定を行う。また、北苑茶焙における片茶製造の各工程を考察し、茶園から早朝短時間に採茶した茶芽を、複雑な工程を経て作り上げる過程を見る。この地で製造された片茶は歳貢にあてられる茶と市場に回される茶とに分けられるが、そのうち前者、この地から毎年春一番に「歳貢茶」の種類、順次都に送り出されるありさま、正貢以外の茶などについて検証する。次に、歳貢茶こそ宋代の片茶文化の最高の姿であったとし、窮極の片茶「龍園勝雪」をもって「北苑茶焙の完成」とする。そして、片茶文化の浸透とともに茶での接待が日常化するとともに非日常的「特別なもてなし方」が茶会として生まれる」と指摘する。さらに、茶会は客を招待して行うものであること、「茶礼」らしき作法が生まれていること、それらを道具趣味と合わせてみると「片茶を中心にして道具と主人と客の三位が一体になった」ひとつの文化体系が生まれていることが伺えるとし、

「北苑茶焙の完成」とともに「宋代片茶文化が完成」したと指摘する。また、この時代に濃茶・薄茶點方の源流がみられることも示唆する。元代から明代になると片茶に対する姿勢に変化が出てきて、明の太祖は片茶製造を中止し、葉茶(煎茶)の進貢にあらためた。これにより、片茶専門の「北苑茶焙」は終焉を迎えて、片茶文化は完全に消え去るが、「中国で消滅した片茶文化は、宋国が減じる時期と相俟って海を隔てた日本で新たな抹茶の文化として花開くのである」とする。

第五章「入宋僧侶と茶の係わり」では、宋代の片茶文化を日本に移入するきっかけを作った入宋僧侶が、入宋中に日常生活の中でいかなる形で茶とかわりをもったか、それが結果として日本にどのような影響を与えたかを考察する。平安時代末期から鎌倉時代(宋代中期から末期)にかけて入宋し巡礼求法した大勢の日本の僧侶たちがいたが、平安時代初期に入唐した円仁の「入唐求法巡礼行記」中にみられる「點茶」の記事と、京都大雲寺住職成尋の中国滞在生活記録「參天台五臺山記」の點茶の記事すべてを検索し表に示す。それを見ると、特に成尋の場合、點茶が日常的な風景として見られるが、そういう記事を検討することにより、茶は接待用に用いると「互いに點茶した方と茶を飲む方との間で結縁を認める」ための飲み物として重要な意味をもつようになっている」と指摘する。とりわけ成尋の各大師との交流は、すでに飲み物の範疇を超えて「師と弟子の心を結ぶ」茶になっていたと主張する。次に、榮西は、二度にわたる中国滞在中に禪林における茶とのかかりと茶が持つ結縁性から、日本の禪宗にも「茶が必

要である」として茶を選んだと述べる。栄西の法嗣圓爾辨圓もそれに続き「明州碧山寺水磨様図」を持ち帰っている。圓爾がそれを筆写して持ち帰った理由を、著者は、栄西は宋から抹茶を點茶する方法を持ち帰ったが、日本では茶を固形茶にする高級技術は生まれず、茶をそのまま末茶にする方法を選んだ。そのために「水磨様図」をもたらしたと説明する。

第六章「日本に於ける喫茶の萌芽とその普及―茶の湯への序章―」では、栄西の茶の招来を受けて日本における茶の発生と普及を考察している。史料は少ないが、宋代に亡びた「末茶文化」を「抹茶文化」へと転換継承していく過程の考察は、当時の日本社会の転換にも関連づけられてたいへん興味深い。この時代、武士や庶民には茶に対する認識はまったくなかったこと、上級貴族や僧侶たちは「茶」の存在は認識していたがすでに形骸化しており、日常的に飲むためのものとは認識していなかったことなどを指摘する。平安初期の喫茶の萌芽は最初から発展する条件はなく、後世の「茶の湯」という文化に影響を与えることはなかった。茶の普及は栄西が茶を招来したことにより、鎌倉時代に入ってから始まると述べる。そして、飲茶が漸次僧侶から武士へと波及した鎌倉中期を、薬用としての時代から嗜好品としての喫茶文化へと変貌して行く中間期と位置づけるが、「まだ薬用を抜け切っていない」と主張する。ここでは「関東往還記」にみられる観尊の「儲茶」を「施茶」とはとらえずに「非時食戒」を破らぬ薬品としての茶であることを確認している。次に鎌倉末期から武士の間でも高級飲料としての茶がかなりこの時期には普及していたこと、茶園の

萌芽が見られること、あるいは「世間売茶」を購入している事例があることから、「茶の商品化」などを指摘し、茶の普及について述べる。また、唐物文物の輸入と相俟って、ついに「唐物の道具で喫茶する」風の流行などを指摘し、茶会の萌芽が見られることをもって、茶が文化へと脱皮したと主張する。なお、著者は茶会を「茶が単なる飲料としてではなく、飲む為の他の要因、例えば精神性・美術品・酒宴などと同次元で表現されるような場合」の会、と定義している。そして、鎌倉時代はまさに「茶の文明開化」の時期であり、その末期には室町期の文化に影響を及ぼすような示唆的なものを持ち合わせていたと述べ、茶の湯史上における鎌倉時代は、中国における晋代のように日本における茶の基礎的成立を見た時代であったと結論している。

さて、以上のような構成と内容を持つ本書の最大の特徴は、従来、栄西による茶の招来以後に限られていた研究に対し、それ以前に視点を向けたところにある。しかも、その源流を日本の枠内にとどめず、中国における「茶」の成立から考察している。そのため、「北苑茶焙」に関わる諸指摘をはじめ、随所に新知見が見られる。そういった点において、本書は、茶の湯（茶道）史研究にとって大きな画期をなす研究といえる。また、中国の文化史の点からみても、本書で展開された分析は貴重なものとなる。さらに、本書は、先学の成果をたどりつつ自説を展開するが、細微に至るまでの宋代茶法史料の解説と分析は、本書を支える大きな柱となっている。これについて、著者は煩瑣と謙遜するが、膨大な数値データを緻密に整理し、それを表や地図で示した上での考察

には説得力がある。そして、文化だけではなく、政治・外交・経済等、様々な分野への関連性を持つものであるが、著者の基本姿勢として、単なる「茶の歴史」ではなく「茶の文化史」を求めるという姿勢が見られ、茶の湯に造詣のある著者ならではの独特な指摘が可能となっている。これらを基盤に、本書の目的である「中国にとって茶とは何であったか」を考察し、「茶の湯」という日本の重要な伝統文化」の出発点の位置づけとその姿を浮き彫りにするということについて、中国において「末茶（片茶）」文化が完成したのは宋代であったが、宋が元により滅ぼされると程なく、末茶という飲用方は中国全土から消滅してしまい、かろうじて当時僧侶たちによって移入された日本にのみ末茶文化は残ったことである、とまとめている。

以上のような特徴を持つ本書について、筆者なりの評を述べさせていたきたい。本書は、註により中国の用語等に至るまで詳細に解説され、かつ、引用史料がすべて読み下しとなっており、読者には読みやすく、たいへんわかりやすく構成されている。反面、史料については、原文との確認が必要とされる部分もあり、何らかの形で原文の掲載がほしかった。

また、喫茶の普及、茶の存在意義が変貌していく過程はわかりやすく述べられていて、まさに、茶道が確立するまでの前段階史といえる。ちょうど、武家の社会が発展しようという時期、東西の茶の招来を契機に茶の普及がはじまったところは、非常に興味深い。公家社会には茶の発展がみられなかったこと、武家社会に広まった禅と茶との関わりなどの著者の指摘を見るにつけて、武

家社会が茶を受容した要因についてはさらなる検討の余地があると思われる。しかしながら、これは中世前期を研究する我々に対して投げかけられた今後の課題ともいえよう。茶の湯（茶道）史にとって、茶の成立から日本への伝来を論じたことの本書の意味は重要であり、茶道史はもちろんのこと中世前期の武家社会・日中文化比較を研究するにあたっても必見の書ともなりうらと思うれる。

以上、拙いながらの紹介と評を述べさせていただいた。筆者の理解不足については、著者及び読者のご寛容を願うものである。
 〔二〇〇三年一月刊 A5判 六一六頁 一二〇〇〇円 雄山閣〕

富坂キリスト教センター編 『女性キリスト者と戦争』

横山 恵美

本書は、富坂キリスト教センター（文京区）のプロジェクトの一つとして発足した女性史研究会による論集であり、前作『近代日本のキリスト教と女性たち』（新教出版社、一九九五年）に続く第二集として刊行されたものである。この研究会は、前作の「まえがき」によれば、一九九〇年三月に「民衆女性と近代キリスト教」研究会として発足し、「従来の日本のキリスト教に関する歴史研究が、近代化の担い手、民主主義の担い手としてのキリスト教

を弁証しようとする態度であったことを批判的に捉え直し、そのような視点から切り捨てられていった民衆女性の歴史的現実に光を当て、「あくまで丹念に実証的研究を積み、歴史のひだにたまためて日の目を見なかった女性たちの発している嘆きや叫び、また時としてあがったであろう歓声を豊かに汲み上げることを心がけていきたい。」という趣旨のもと、大学教員、牧師、弁護士、カトリック、プロテスタントなど、世代と生業を異にするメンバー一〇名で活動を開始した。

第二集となる本書は、プロジェクトの二期目として、一九九七年に一〇名のメンバーで発足した「近代日本キリスト教女性史（Ⅱ）研究会」が、二〇〇二年春までの五年間に延べ一八回の例会を重ね、一五年戦争期における女性キリスト者・婦人団体・ミッシヨンスクールの動向を多角的に検討した共同研究の成果である。「近代日本に生きた民衆女性の歴史的現実に光を当てる」という前作の趣旨は、本書にも継承されているが、対象とする時期を一五年戦争期に限定している点に本書の特徴がある。

本書の意図は、奥田暁子氏の「まえがき」の言葉に明らかである。すなわち、「一五年戦争期のキリスト教界についてはすでに多くの先行研究があり、かなりの程度まで解明が進んでいるが、女性キリスト者に関しては、彼女たちがどんな状況におかれていたか、またどんな時代認識を持っていたのかの解明はまだ不十分である。本書ではさまざまな角度からこの時期を生きた女性キリスト者に焦点を当てることで、全体像とまではいかなくとも、一五年戦争期の女性キリスト者の思想や動向を明らかにしたいと考え

た。」

本書の構成は次の通りである。

まえがき

第一章 戦時体制とキリスト教幼稚園

― 青山学院を中心に ―

奥田暁子
大里喜美子

第二章 戦時下のミッシヨンスクール

第三章 植村環―時代と説教―

第四章 帝国意識の生成と展開

― 日本基督教婦人矯風会の場合 ―

第五章 大陸政策の中の北京愛隣館

第六章 小泉郁子と「帝国のフェミニズム」

出岡 学

あとがき

加納実紀代
荒井英子

第一―三章は、キリスト教幼稚園、ミッシヨンスクール、植村環といった日本国内のキリスト教組織とそれらに関わった個人の活動に焦点をあてた内容であり、第四―六章は、日本基督教婦人矯風会、北京愛隣館、小泉郁子といった、日本が侵略した中国で活動した女性キリスト者組織と個人に焦点をあてた内容となっている。

以下、各論文の内容を簡単に紹介しておきたい。

大里論文は、日本の幼稚園創立に深く関わった西欧の女性宣教師たちの活躍とフレーベル主義キリスト教幼稚園の歴史を辿るとともに、一五年戦争下にキリスト教幼稚園が、戦時保育体制のもと、心身共に強靱な、戦時にふさわしい皇国の予備軍育成のため様々な指導・強制を受け、最終的には戦時託児所か休園を余儀な

くされた経緯について、青山学院緑岡幼稚園（一九三七～四四年）を例に、主任田村忠子らの残した教材や資料などからその抵抗の実態を明らかにしている。

奥田論文は、全国各地の英米系女子ミッションスクールの歴史を分析して、一五年戦争下にそのほとんどがキリスト教主義教育を廃止して国家主義的教育を半ば自主的に実践したこと、その直接的原因は、文部省による強制的指導に加え、地域社会の監視の目と迫害、新聞を始めとするマスメディアの論調が日常的にミッションスクールを追い詰めていったためであることを、西南女学院と広島女学院の事例から実証するとともに、戦時下にミッションスクールが自主規制あるいは積極的に国策協力をしたにもかかわらず、戦時下を「受難の時代」とする被害者意識が戦後も続いていることに対して、戦争責任の問題を厳しく問いかけている。

荒井論文は、日本で二人目の女性牧師で、日本YWCA会長として、また戦後は平和運動家として近代日本のキリスト教女性史に不動の地位を築いた植村環を取り上げ、戦時下に日本基督教団婦人事業局長として戦時協力態勢の牽引役を担った事実を掘り起こすとともに、YWCAの機関誌「女子青年界」の巻頭説教の分析を通して、一方において戦意高揚を煽り、他方において反戦を勧める植村の言動と戦争責任について検証している。

早川論文は、一八八六年発足の日本基督教婦人矯風会の機関誌を詳細に分析することで、一九三〇年代以降の矯風会の戦争協力と対外認識の内実を明らかにする。すなわち、矯風会は日清戦争以降一貫して「皇室尊奉」「軍事援護」「文明主義」の立場に立つ

書評と紹介

て「東洋平和」を唱え、一五年戦争期には日本の侵略行為を正当とした「日支親善」へと展開していったこと、また矯風会が当初から情熱を傾けてきた廃娼運動は、戦時期には性病問題に帰結し、廃娼問題は完全に骨抜きとなったことを検証している。

出岡論文は、日本基督教連盟による「皇軍慰問」事業の一つで、女性キリスト者による医療セトルメントとして、一九三九年に開設された北京愛隣館を取り上げ、それが日本の大陸政策の一環であったことを新たに発掘した外務省資料などから考察する。すなわち、日本キリスト教界の大陸進出は、中国民衆に対する宣撫活動を行なうとともに、当時強い影響力を持っていた米国キリスト教勢力を中国から排除するという特別の任務を帯びていたこと、そして日本キリスト教界は愛隣館の設立という形で、軍の「中支宗教工作」の要求に自ら積極的に応えていった事実を明らかにする。

加納論文は、キリスト者でありフェミニストであった小泉郁子の生涯と思想を丹念に追いながら、「断固たるナショナリスト」としての郁子の戦時下の中国での活動を考察している。「青鞨」に出会ってフェミニズムに目覚め、米留留学後フェミニストとして活躍した郁子は、一九三五年北京に渡り、夫の清水安三と共に北京崇貞学園を経営して教育的宣撫事業を展開する。日本の軍事力の庇護のもとに、「名流婦人」中心の「日支親善」に尽くした邦子は、国際的な視点や先進性をもちながらも、結局「帝国のフェミニズム」から脱却できなかったことを検証する。

以上の論文を総括するならば、奥田氏のいうように、「女性のキ

リスト者の多くは帝国主義の先兵としての役割を演じた」と結論づけられるかもしれない。しかし、彼女たちの行動をただ批判するのではなく、なぜそうなったのか、一つ一つの事例についてその原因や背景を探り、彼女たちの抱えていた苦悩や心理的葛藤を含めてそのプロセスを説明することが重要であり、本書の意義もその点にあるといえよう。

女性史研究の場合、とりわけ一五年戦争期における資料的制約は非常に大きいと思われるが、本書では、教界新聞や機関誌などの史料発掘と分析、関係者からの聞き書きをもとに、点在する史料をつなぐ作業を通して女性キリスト者の人物像を丹念に描き、彼女たちの思想と生涯を歴史的に位置づけようと試みており、その姿勢は高く評価できよう。

しかし一方で、本書が一五年戦争期という限定された時代を扱っているため、各論文中に日本基督教団、矯風会、愛隣館など同じ組織・機関が何度も登場することになり、それが日本キリスト教界全体の動向をかえってわかりにくくしてしまったように思われる。研究会の共同研究の成果として、戦時中の時代背景と日本キリスト教界の動向を比較・対照できるような年表を巻末に掲載すれば、予備知識のない読者にも理解しやすいものとなったのではないだろうか。

また、女性キリスト者の活躍は、教育事業や社会・福祉事業の分野において顕著であったことは本書からもうかがい知ることができるが、戦時下にキリスト教幼稚園や女学校が受けた迫害や弾圧に対して、経営者や保母・教師の側からの考察は多くみられる

ものの、その教育理念に賛同して子供を入学させた保護者や、そこで学ぶ女学生たちは、当時の学校側の対応をどう受け止めたのか、また教育方針や教科内容にどのような質的変化が具体的にみられたのか、といった疑問に対しては、十分な検討がなされているとはいえない。資料的な制約があることは承知しつつも、教育を受けた側からの教育機関の実態解明は今後の課題の一つであろう（なお、加納論文に関連して、今年七月に刊行された山崎朋子著『朝陽門外の虹 崇貞女学校の人びと』（岩波書店）は、一〇年近い年月を費やして、中国人・朝鮮人・日本人の元生徒から聞き書きを行っており、参考となるだろう）。

「あとがき」によれば、本書に収録予定だった皇室女性とキリスト教との関係や、フィリピンにおけるカトリック女性の活動など、いくつかの興味深いテーマがまだ残されているという。女性史研究会の今後の活躍とともに、第三集の刊行に期待したい。

最後に、筆者の力不足のため書評としては不十分な内容となってしまったことをお詫びするとともに、前作とあわせて本書を一読されることをお薦めする。

（二〇〇二年一月刊 A5判 二九五頁 二六〇〇円（本体）
行路社）